

Y 2008 No.43



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

新刊紹介

○斜陽に立つ

古川 薫



“旅順開城約成りて 敵の將軍ステッセル 乃木大将と会見の 所はずこ水師營”

昭和戦前に育った子供たちがうたった文部省唱歌。日露戦役でもっとも名を知られたのはこの乃木大将と東郷元帥であった。今、この両將軍をなつかしく思いおこすのは幾人たりや——と思わざるを得ない。明治は遙かなりである。山口、下関市生まれの古川さんが描いた乃木將軍の生涯を描いた伝記小説。乃木希典は長府藩邸内の長屋で

誕生。今は高級マンション群れ立つ六本木ヒルズの場所説から物語ははじまる。なかで司馬遼太郎著の『殉死』に軍事作家として無能にちかかったとあることについての批判もくわえられている。しかし、満州軍総参謀長児玉源太郎と乃木希典という双曲線をなして武人として生きた明治の日を、古川さんは多くの角度から照明を当て、斜陽に立つ乃木という人物をていねいに描きあげられた好著である。

○折り

田中裕子



秋の陽を浴びて
ひらいたまつかさ
金色にぬって行く
フェスティバルまで一週間
もうすぐ聞こえる
ランドセルの中で
ノートや筆箱が跳ねる音
光のように散乱する足音

ひとりの時に
知らない人が歩いて来たら
じゅうぶん離れて
すれ違いなさい
歩道では
なるだけ車道から離れなさい
だれにも捕かまえられないように
怖いことがあつたなら
お腹の底から低い声を出して
叫びなさい
何度も何度も息をつぎ
叫びながら逃げなさい

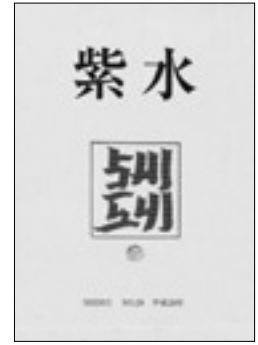
—後略—

受贈図書紹介 ㊦

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。
あしからずご了承下さい。

ぶらり秋月 …………… 野上 眞良 朝倉 市
歌集天の雫 …………… 上村 忠雄 大牟田市
人生に卒業はない …………… 吉田 誠子
亡き妻へ …………… 西 行夫

坂道の町 …………… 久永 大
もっと輝いてシニアライフ …… 中村 義
俺の海軍時代と戦後 …………… 矢崎 高徳
百七通の軍事郵便 …………… 山口ひとえ
遙かなる絆 …………… 朝永 清之
嗚呼青春のグラフィティ ……… 浜田 覚



○歌集 夢ならば
中島輝洋子

夕立の過ぎるを待ちて一斉にひぐらし啼きて暑さ戻り来
「幸せになろうよ」なんて人並みに誓った人も過去のまぼろし
三十一のことばの糸がむすべない歌をつくれと師のこゑ降るに
ひとり聞く花火の音によみがえる君と過ごせし初なつの海
祈るやうに雨のしづくを手に受けて「雨に唱えば」ハミングしたり

○季刊 文章歩道 夏号
毎号寄贈を受けている随筆雑誌である。

喜早哲さんの「抒情歌その25」はNHK番組『夢をあなたに』の中での「今月の歌」の一曲。『銀色の道』秘話を興味深く読む。
遠い遠いはるかな道は
冬の嵐が吹いているが
谷間の春は花が咲いて
る……
作曲家宮川泰さんは北海道留萌の生まれとか。歌碑を建てようといった気運についても書かれている。つづいて読んだのが古池範子さんの「でんぐり返し」孫の貫太くんがでんぐり返しを上手にやってみせる。それを見ながら体操が苦手だった少女の日を回想する範子さん。

○文芸宗像 楠の会
群青 第9号

この『群青』も刊行のたびに寄贈を受けている。小説、エッセイ、童話、詩に川柳と多彩な内容。八女高出身の詩人深町準之助さんエッセイに「詩と私」深町さん自身の詩の履歴書といってもよいし、詩をとおしての自分史としても読める。
秋はまっさかさま
がくんと首うなだれて
暮れる。
そうか そうなのか
人間 本来 無一物
そうじゃないのかな
と虫が鳴く
納得して戸を閉める
では又 明日

○紫水 No29
格調高い内容充実のエッセー誌である。しかしながら同人あいつぐ逝去で、ここへ来て入れ替わりの時季かと、編集秋山喜文さんの後記。まず巻頭森山靖章さんの「コミュニケーション周辺雑話」で、小学生では英語教育は早すぎるのではないかとのご意見。大学生こそ、しっかり会話のできる英語をやろうと提唱。「日本人学生は恵まれていて甘えすぎている。英語は世界共通語である。当然マスターしておくべき言語である」。中島典人さんの作家城山三郎追悼記は自分の海軍体験と照らし、城山さんの人となりをよく読みとらえている。田島安江さんの「本が作りたくて」は出版社をたちあげた理由が描かれている。

編集掌記

▼七十を越えれば、一日一日を生きていくのが仕事だといった言葉が聞いたことがあるが古稀をこえて八十に手がとどく齢ともなればそれが実感されてくる。一冊の本ぐらい、一夜で読みあげていたのが今では夢のようだ。▼宮尾登美子さん原作のNHK大河ドラマ『篤姫』が好評のようで、『篤姫の生涯』を読みはじめたが一夜での読みあげは至難。トボトボと活字のうえを眼が歩くといったぐあいである。それにしても薩摩が生んだ篤姫さんはえらいもんだと思う。独特の精神的文化的風土に培われてきた気魄と矜持。
▼宮尾さんがこの本の終行に篤姫昏睡のとき、その脳裏に描かれたのは、桜島の噴煙か、それとも夜具のなかでさ

みしい笑顔をみせて笑った夫家定か——と書かれた文章は胸にしみる。篤姫が少女の日に過したという今和泉郷のあたりを鹿児島県の三嶽さんから案内してもらっているだけに、あの南国情趣と共に印象深いのである。

(自分史図書館長 椎宏澄)

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしておりません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan